



2025年（令和7年）

9月号（No. 964）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

第3回カナダ・ユースプロジェクト 最終年にアルバータ峰登頂

草野駿希

YOUTH CLUB委員会が3年計画で立ち上げたカナダ・ユースプロジェクトも今年が最終年。彼らが仕上げとして目指したのは、100年前の1925年にJACの先輩たちが初登頂したマウント・アルバータ。カナディアン・ロッキーで最後まで未踏で残されたこの難峰に挑んだ、10人の若者たちのレポート。

100周年記念で再登を目指す

カナディアン・ロッキーのアルバータ峰（3619m）は1925（大正14）年7月、横有恒を隊長とする慶應大・学習院大合同隊6名と、スイス人のガイド3名によって初登頂された。日本山岳会が創立120周年を数え、アルバータ峰初登頂から100周年の節目の年を迎えた今年、私たちはアルバ

ータ峰の再登を目指すことになった。

今回のメンバーは全部で11名。隊長が松原尚之（YOUTH CLUB）、副隊長に平野直子（千葉支部）、登攀隊長にカナダ・キャンモア在住の谷剛士（東海支部）。隊員は東海支部の草野駿希と中畑岳登、広島支部の大野雅樹、信濃支部の高橋湧太、学生部委員会からは宮地聡（東海DOB）、山上耀一

目次

第3回カナダ・ユースプロジェクト 最終年にアルバータ峰登頂	1
噴火繰り返す有珠山で「交流集会」	
北海道支部創立60年を記念して	4
山の名著再読	6
追悼	8
カラコルム・バルトロ氷河を往復	
威風堂々たるK2と感激のご対面	10
新入会員	13
東西南北	14
支部だより	16
図書紹介	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室

郎（学習院大DOB）、中田康太郎（慶應DOB）が参加した。松原、平野、谷を除くと、全員が20代、30代前半の若いメンバーである。以上10名に加えて、キャンモア在住で元NHKカメラマンの安食昌義が撮影班として同行した。

山に入る前日の7月21日、ジャスパールでアルバータ峰登頂100周年記念式典が催された。この式典を通じて、アルバータ峰が地元の方々にとって、いかに畏敬の念を抱かれている山であったか、また、初登頂を成し遂げた日本人とスイス人がどれだけリスペクトされているかということ、改めて感じる事ができた。

登頂後、3300mでビバーク

入山初日はアルバータ小屋を目

指した。朝まで雨が降っており、7月下旬なのに道路脇にはわずかな新雪が積もっていた。ただ、心配していた徒渉は水量が少なく、問題なかった。溪流沿いを3時間も歩くと、氷河を抱く切り立った峰々が眺められるようになった。途中からはルートも不明瞭で、ガレや浮き石の多い区間へと変わったが、8時間ほどの歩行でアルバータ小屋へ無事到着した。2000年にカナダ山岳会と日本山岳会が資金を出し合って建設したこの小屋は、小さいながらもとても快適に過ごすことができた。

2日目は隊を2つに分け、A隊の5人（谷、高橋、宮地、草野、中畑はアタック・キャンプ（以下AC）より上部のルート作業を行ない、3ピッチ、ロープを張って戻



アルバータ小屋から見たアルバータ峰の全容

でいった。岩稜帯はカムやナッツを使用したけど、ここではスクリューの方が有効だった。進んだ先で稜線に出た。

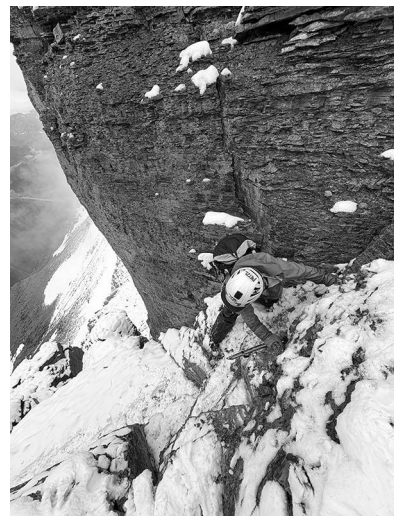
朝方はガスだったが、やがて雨が降り始め、次第に雪へと変化していった。雨に濡れて体温を奪われ、みな疲労が出てきていた。中畑は稜線へ出ると同時にこれ以上進むのは厳しいと申し出て、風を避けられる岩の陰で待機することになった。谷、草野は先に進み、宮地、高橋も後に続いた。稜線は鋭く、油断できないところからコンティニューアスで進んだ。テクニカルな区間では前を行く谷のペースが速くて、何度も待つてもらった。稜線では一度だけ懸垂下降を行なった。当初は遅くとも15時には引き返す予定だったが登り続け、16時20分、谷と草野はようやく山頂に到着した。

記念写真を撮ってすぐに下り始めた。宮地と高橋もすぐ近くまで来ていると思っていたが、なかなか合流できなかった。すでに引き返したと思い始めたところに、やっ

と2人と行き会った。彼らはまだ山頂に向けて登って来ていたが、日没も迫り、天候の崩れも近づいていた。谷が2人に引き返す指示を出した。一瞬の動揺はあったが、2人とも了承した。私は彼らに掛ける言葉を見つけられずにいたが、少しの沈黙の後に、

「ナイス!」、「よくやった!」と2人が拳を突き出してくれたことで、強く拳を突き返すことができた。

下降点に戻ると、中畑がツエルトを被っていた。彼の状態が気になったが自分の数メートル先を歩く谷の声掛けに、ひよつこりと顔を出した。先ほどよりも元氣そうで安心した。懸垂下降の準備をし、ヘルメットにヘッドランプを装着して全員で下り始めた。2ピッチ目の下降から天候が急変した。ぱらついていた雪が大粒に変わり、岩稜帯を白く染め上げていった。同時に上空では雷がゴロゴロと鳴る。雪については皆で心配していたが、雷が真上で光り鳴り響く状況には、本気でヤバ過ぎて誰も口をきけなかった。



3300m付近のもろい岩場を下降する大野隊員

下降を進めるうちに日も落ちた。下りる先は暗く白く不明瞭になる。凍り始めているロープに悪戦苦闘し続けた。23時20分に標高3300地点でビバークを決定した。暗い中で雪も降り続き、メンバーの動きも鈍くなっており、疲れているのは明らかだった。ビバークは横になれるスペースはなく、ツエルトを被って座ったまま日の出まで待つ。最大限に防寒対策はしていたものの、体が震えてくる。行動食を食べてエネルギーを摂取する。雨や雪で服は濡れ、登山靴の中もびしょびしょだ。インナー・グローブにテムレスもしていたが、岩を何度もつかんできたため小さな穴が開いて、そこから水が入っている。手足の指先を動かし続けた。

った。B隊の5人(松原、平野、山上、大野、中畑)はACの設営と荷上げを行ない、小屋へと戻った。3日目、A隊は午前2時起床。アイゼンを装着して3時過ぎに出発した。谷・草野・中畑のパーティーと、宮地・高橋のパーティーで進んだ。岩稜帯でのアイゼンを装着した登攀はさほど難しくはなかったが、岩がもろいので気が抜けなかった。ジャパニーズ・クロウワールに着くと雪が上部までつなっており、このクロウワールを進ん



アルバータ山頂に立った谷登攀隊長(左)と草野隊員

2次アタックは中止

それでもようやくウトウトしたころ、隣に座っている宮地のスマホからアラームが鳴った。起きる時間かと思ったが、宮地はなんだか慌てていた。その様子を見た私は「宮地さん、もしかして昨日のアラームですか?」と聞くと、「そうそう、消したつもりだったのに……」という答えで、ほかのメンバーからも笑いが起きた。笑いが起こる雰囲気ならこの状況も大丈夫、と思えたのは深夜2時ごろだった。

日の出前から4日目の行動を開始した。落石に気を遣うジャパニーズ・クロワールの懸垂も残り

後1ピッチという所まで下りたところで、中畑がロープ回収時に左足首を怪我してしまった。ビレイ点だとロープが重くて引けないから、セルフビレイのスリングを伸ばして、左の方へ行つて引いていたところ、ロープが抜けたはずみで数メートル滑落したのだった。

無線でアルバータ小屋にいるB隊に連絡をとると、彼らも我々のサポートのためにACまで上がって来ると連絡が返ってきた。怪我をした直後、中畑は自力で歩けずACまで戻るのも難しく見えたが、少したつと足をついてなんとか歩けるようになった。その後も3ピッチ、ロープを出しての懸垂下降を終えたとき、松原と大野が下から上がって来てくれた。松原は谷とともに中畑のサポートをしながら下り、大野は残りのメンバーにお湯やスूपや食べ物を持運してくれた。ACに戻ると、平野と山上も出迎えてくれ、中田と安食は、小屋で無線交信と水作りをしているとのこと。

中畑はヘリ救助ということになり、悪天候を衝いて飛んでくれた救助隊のヘリにより、その日のうちにジャスパーへと移送された。

中畑以外のメンバーは17時ごろ、無事にアルバータ小屋へと帰還した。B隊の2次アタックについては、天候その他の状況を考慮し、中止することになった。5日目はアルバータ小屋で休養日とし、6日目に下山して私たちのアルバータ峰への挑戦は終わった。

＊

今回の遠征を通して感じたことは、近年はSNSによる「個」での登山が増えていいるなかで、海外登山の経験豊富なベテラン会員の指導の下で若手が海外の山に挑戦し、国を超えた山岳会のつながりによって交流することができるのは、日本山岳会の強みであると思えた。

そして、今回の遠征には日本山岳会の関係者の皆様から多大なご支援、ご声援をいただきました。また、個人としてご支援してくださった方々にも、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。ありがとうございます。

「カナダ遠征行程」

7月19日 成田―カルガリー―キヤンモア

20日 雨天、室内ボルダリング
21日 ジャスパーで記念式典

22日	山行1日目、アルバータ小屋へ
23日	2日目、AC設営とルート作
24日	3日目、頂上アタックおよびビバーク
25日	4日目、ACおよび小屋へ帰還
26日	レスト
27日	下山
28日	各自クライミングまたは休息
29日	各自クライミングまたは登山
30日	キヤンモア―カルガリー
31日	成田帰国

(東海支部会員)



下山日、アルバータ峰を背景に小屋での集合写真

REPORT

噴火繰り返す有珠山で「交流集会」 北海道支部創立60年を記念して

98人が交流、交遊を深める

北海道支部創立60周年兼第38回東北・北海道地区交流集会が7月11・12日、洞爺湖畔の洞爺湖町と壮瞥町の洞爺湖有珠山ジオパークで開かれた。全国15支部と本部から98人が参加し、20・30年周期で噴火してきた有珠山（733m）エリアで生きた火山を体感、見聞する機会を持っていただき、交流を深めてもらった。

11日は洞爺湖文化センターで記念講演を行ない、有珠山の2000年噴火で被災した温泉宿の女将で、NPO法人・洞爺湖有珠火山マイスターネットワークの川南恵美子事務局長が「有珠山とともに生きる―火山との共生が教えてくれたこと」と題して講演。

川南さんは、噴火を繰り返してきた活火山と近接して生活圏がある洞爺湖温泉の地理特性を概説。その上で、「三松正夫という先人が始めた火山を敵とせず、共生す

北海道支部長 黒川伸一

る姿勢が私たち火山マイスターに受け継がれたDNA」として、人的被害がゼロだった2000年噴火時の被災と避難状況について実体験を交えて紹介、この火山災害を機に生まれた火山マイスター制度について解説した。さらに「火山の国に住む以上、私たちはもつと火山のことを知るべき」「火山マイスターとして、日常の活動を通じていち早く山の変化に気づき、研究者らに伝えることが我々の役割」とも言及した。

講演後、参加者らは、2000年噴火時に温泉裏で数多くの噴火口ができて熱泥流被害を受けた温泉街の一角、金比羅火口災害遺構散策路の一部、町営住宅や温泉施設、国道230号の橋梁跡などを見学し、宿泊場所である洞爺観光ホテルに移動して温泉入浴で寛ぎ、懇親会に臨んだ。

懇親会では、参加した各支部からの活動報告が行なわれ、各所で支部のお国自慢の地酒も酌み交わ



有珠山との共生について講演する川南恵美子さん

しながら大いに盛り上がった。懇親会後はホテル前の遊歩道に出るなどして、湖上花火も一興を添えて洞爺湖温泉の時間を楽しんでもらった。

12日は、A班・有珠山火口原（1977年噴火現場）、B班・昭和新年（1943・45年噴火現場）、C班・西山山麓（2000年噴火現場）の3班に分かれて、火山マイスターのガイドで立ち入り禁止・規制エリアにも入って、噴火口跡や今も火山ガスや蒸気が噴出したり地温が高い一帯、噴火災害の生々しい傷跡をそれぞれ3・5時間ずつ歩いた。



A班：有珠山山頂脇に広がる火口原にて

火山防災・減災の最前線

今回の集まりは、北海道支部にとっては2018年7月に層雲峡温泉と大雪山系（表大雪）で開いた全国支部懇談会以来の大きな交流集会（登山）だった。東北6支部と毎年巡回開催している東北・北海道地区交流集会に「北海道支部創立60年」の冠を付けて開催することが決まった2年前、洞爺湖温泉を開催場所として準備を始め、支部の多数の方の手を煩わせて無事開催できた。

洞爺湖温泉を会場に選んだことで、火山を体感することをテーマ



B班:昭和新山山頂手前にて洞爺湖をバックに

に据えた。2025年が、直近の噴火(2000年3〜4月)から節目の四半世紀に当たることも好都合だった。

有珠山は標高こそ低いが、この1世紀余り、1910年噴火(明治新山^{よそみ}四十三山と洞爺湖温泉誕生)、1943〜45年噴火(昭和新生)、1977年噴火(山頂火山誕生)、1977年噴火(山頂火山麓噴火)と激しく噴火してきた歴史がある。

その経緯を踏まえると、次の噴火がいつ起きてもおかしくない周期に入っている。国内の火山の中



C班:地盤隆起で階段状になった国道230号。西山山麓にて

でも、この山は人の生活圏、観光地に至近距離での噴火の頻度が際立つ。

洞爺湖温泉周辺では2000年噴火以降、噴火を繰り返す火山との共生という考え方が一気に浸透した印象が強い。その代表的な取り組みが、2008年にスタートした火山マイスター制度だ。有珠山周辺の自然や地域特性を学び、過去の噴火災害を語り継ぎ、減災や防災の知恵を伝える役割を担っており、現在72人が登録し、研鑽^{けんさん}を続けている。

今回の集会では、火山マイスターの取りまとめ役を務めてきた川南さんに有珠山の火山環境とマイ

スター制度について総括的な話をしてもらった上で、実際に火山マイスターら14人のガイドで、3つの噴火現場を歩いてもらうことに主眼を置いた。

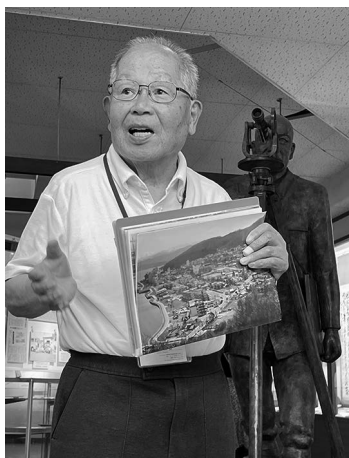
参加した皆さんが折に触れ、有珠山周辺の美しい景観や温泉などの恵みとともに、火山との共生を目指した防災・減災最前線の取り組みを思い出していただければありがたい。

三松三朗さんが急逝

洞爺湖温泉での火山との共生は、1943〜45年、戦時中、情報統制で噴火情報が伏せられ憲兵に睨^{にら}まれながらも昭和新山の生成過程をスケッチ(ミマツダイヤグラム)などで残し、その後、山を買い取って保全や火山防災の啓蒙活動を担った地元の元郵便局長・三松正夫(1888〜1977年)

に^{あつ}遇する。その精神を受け継ぎ、今日の有珠山周辺の火山防災・減災の基盤整備に尽力した昭和新山のオーナーで三松正夫記念館館長・三松三朗さん(88)が7月29日、急逝された。

大阪出身の三朗さんは帯



三松三朗さん。2024年6月撮影

広畜産大獣医学部に進学、山岳部に所属して日高山脈や大雪山系などで山のキャリアを積み、三松正夫の孫娘・泰子さんとの結婚を機に三松家の婿養子となり、捕鯨会社勤務を経て40歳のとき洞爺湖畔に移住して正夫の取り組みを継承した。

1977年と2000年噴火を経て、有珠山の火山防災・減災の取り組みの中心として活動、火山マイスター制度立ち上げと官民への浸透で多大な貢献をされた。

三松三朗さんには、今回の交流集会開催の企画に当たり、有珠山エリアの特殊性や火山マイスター制度を学ばせてもらい、1年前に行なった昭和新山でのテスト山行でも顔を出してお話いただいた。これまでの尽力に敬意を表し、ご冥福を祈りたい。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(49)『森林・草原・氷河』

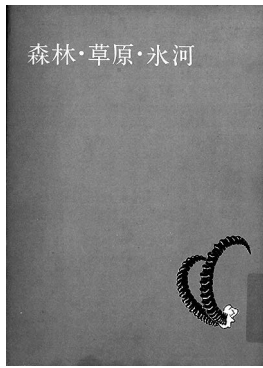
(加藤泰安著・茗溪堂)

絹川祥夫

本書については、挟み込まれた葉にある深田久彌、井上靖、三田幸夫、桑原武夫、今西錦司による、本書と著者の人となりを語った紹介文で十分である。が、大先輩の本を何十年かぶりに読み返してみると、これがすこぶる興味深く心躍るものがあつたので、拙文ながら改めて紹介したい。

書名は、大興安嶺の森、草原の蒙古からヒマラヤの氷河と悠然たるものであり、探検の思い出もあれば、ヒマラヤ初登頂物語、山の教えもあつて多彩だ。

まず最初の「山の遍歴」と題した小文がいい。自分はなぜ山登りを



昭和41 (1966)年初版発行

始めたのか、どんな地域へ出かけたのか、どんな山登りをしたのか、その想いの丈を描いている。《蒙古の一角から、ヒマラヤの峰々を眺めた西北の空の夢をいまでも持ち続けている》。著者このとき55歳、想いはいまだ瑞々しく、謙虚である。

チョゴリザでは、登頂の瞬間を《頂上は小さな岩で二人が立つには狭すぎた。二人は頂上を前に手を握り合いながら、そつと、この気むずかしい花嫁を抱いた。4時30分であつた》。加藤さんほどの偉丈夫にしてこのロマンチックさである。サルトロ・カンリでは《山との付き合いは35年、女房とは、たかだか20年、物の順序として承知してもらふより仕方がない》と奥様を説得した。この台詞は、井上靖の小説『あした来る人』の作中に使われて有名になった。井上氏をして《こうした台詞を考えること

に於いては、氏は天才である。》と言わしめている。この2編と、ニユーギニア探検記にはやはり心昂ぶらせるものがある。

登山論では、いくつかの名言を挙げておきたい。《山登りとは、足で登るものではなく、心で登るものである》(《登山のために》)、《いまの若い登山者たちは登山の知識は持っているが、山登りの知恵は持たない》(《デルス・ウザーラ》)、《山登りが好きだから行くのである。これは一種の遊蕩ではないだろうか》(《ヒマラヤの蕩児》)、《登山とは元来、どう考えても、文化的行為ではあつても、文明的行為ではなく、向人的であるよりも、むしろ厭人的なものであるはずである》(《登山の指導者は厳密な意味で言うならば、山そのものであつて、先輩、経験者というものは、単なる助言者にしか過ぎないものではないだろうか》(《登山指導者の責任》)。登山は文化的行為ではあつても文明的行為ではない、これが加藤さんの山の教えである。

ところで、加藤泰安さんは四国・大洲藩主の末裔で、武門の誉れ高くその教えが本書にも見える。たとえば、自らの山登りには、「望

蜀」のそしりをまぬかれなにと、あるいはサルトロ・カンリでは1次登頂に続いて若い隊員たちは次々と意気込むが、先祖の賤ヶ岳の闘いの日記に「中入り後の切れの戒め」と言い伝えがあり、成功したときは成功に慣れて、敵地に滞滞することになる。一時も早く敵との接触を断つ、すなわち「切れ」をとる決心をするのが良いと説く。私もスキャン・カンリ初登頂で帰国すると、第一番に、今回は「初陣の初首」だと言われたことがある。これらはいずれも、成功に驕ることなく人は謙虚たれ、という戒めである。

最後に前記諸氏の泰安観を――「タイアンの本は、日本の登山を正統な方へと導く大きな力になるだろう」(深田)、「優れた不朽の山の名著」(三田)、「話し上手」(今西)、「文は人なり」(桑原)と、まこと名著にふさわしい。

泰安さんは日本登山界の黎明期を知り、その発展の先陣を切つて、贅沢な時代を生きた登山家であつた。これほどの本がいまだ文庫本にならないのはどうしたことか。

(学習院大学山岳部OB、山櫻会会員)

『山・人・本』 (島田巽著・茗溪堂)

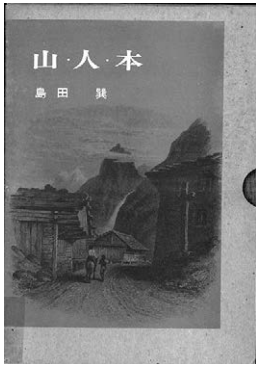
節田重節

著者の島田巽^{たけふ}さんは、その華麗な経歴が示すとおり、日本山岳会の知性を代表するひとりである。

JACが誕生した年と同じ明治38(1905)年、東京生まれ。慶應義塾大学政治学科を卒業後、1931年、朝日新聞社に入社、東京本社欧米部長やロンドン特派員、論説副主幹、*Japan Quarterly*のエディターを歴任したのち1965年、人事院に移り、3期12年にわたり人事官を務めている。

本書は昭和51(1976)年に茗溪堂から出版されているが、同じ版元から『山稜の読書家』も出ており、山の本だけでなくほかにも多くの著書を上梓している。

島田さんのJAC入会は昭和5(1930)年で、藤島敏男^{やましろ}の勧めで入会、紹介者は島山悌成^{やましろ}、松方



昭和51(1976)年初版発行

三郎両氏である。大正後期から昭和初期にかけての、山書出版が花盛りだった『第1次登山ブーム』の時代に入会しているわけで、小島烏水や木暮理太郎など登山界のレジェンドたちの聲^{こゑ}に接し、若かりしころの横有恒や松方三郎など俊英たちが活躍していた時代の空気を共有している。

本書は「山・人・本」五十年のつき合い―「折々の記」「プロフィール」「読後偶感」の4章から成る。1章は書き下ろしで、50年に及ぶ山と人と本の付き合いを回顧。2章はジャーナリストらしい目線で、様々なテーマについて持論を展開。3章は山と本に関わる人物との思い出を綴る。4章はJACの会報などに書いた読書評を収録。いずれも本に対する深い愛情やさりげない蘊蓄^{うんそく}が散りばめられており、本好きにとってはどこから読んでも楽しく、勉強になる。書中に登場する本や登山家の紹介、それにまつわるエピソードなどを読んでみると、既読の本であつても、改めて読み返してみたいと思

わせる魅力が本書は持つている。

1章の中では、「松方さんとの旅」が面白く読ませる。1951年の夏、スイスでの楽しい旅を終えた著者と松方さんは、ベルンからロンドンへ向かう。

《さてロンドン行きの飛行機は午後二時出発。松方さんはベントのピッケル一本をぶらさげ、私はキスリングの店で買い求めたばかりのルックサックをかついで牧草地のような飛行場から双発ののんびりした飛行機で飛び立った。》

というシーンなどは、古き良き時代の豊かな時間の流れを感じさせてくれる。

2章では「登山家ノイスの死」が強く心を打つ。名著『エヴェレスト―その人間的記録』の著者として知られるW・ノイスだが、1962年にパミール^{パミール}の山で、44歳の若さで落命する。著者は彼の死を悼み、次のように記す。

《ヒマラヤでも豊富な経験を積んだ彼のような山男が、すぐれた感受性と表現力を駆使して、今後も語ってくれることを願ったのは、決して私だけではなかったろう。山登りや遠征の記録に新風を吹き入れるために、ノイスは実に打っ

てつけの才能に恵まれていたのである。惜まれてならない。》

「あとがき」にあるように、この本は編集者・作家である近藤信行から示唆を受けてまとめたもので、

《山と人と書物、この三つのもののつながりから往年の著者とその著作とを眺めてゆくのなら、そうむつかしいこともあるまい、と思われてきた。それに、この三つのものを並べてみると、私自身がたどってきた長い道程で、いつも欠かせぬ伴侶であつたことに気がついた。この三つのものとの永年のつき合いについて回顧するのも、楽しいことかも知れない。》と述懐している。

JACの大先達に対して、私なぞ足元にも及ばないキャリアだが、大学山岳部時代に「山」の魅力に取り憑かれ、山岳専門出版社に入社して登山家や写真家、画家、学者など数え切れないほどの「人」と出会い、それらの人々の才能に助けられてたぐさんの「本」を作ってきた私の編集者人生も、僭越ながらこれとオーバーラップする。それだけに、私にとつて忘れられない書名となっている。

追

OBITUARY

悼

濱野吉生さんの逝去を悼む

神崎忠男

1980年の日本山岳会チョモランマ登山隊は、総隊長・西堀榮三郎、隊長・渡辺兵力、副隊長・濱野吉生、宮下秀樹によつて、北東稜（現在は北稜と言う）と北壁の2つのルートから登頂を目指した。その北東稜隊の指揮に当たったのが42歳の濱野さんだったが、2025年3月26日、エベレストより高い所へ登ってしまった。

早稲田大学山岳部では監督、部長を務められたが、1994年2



濱野 吉生（はまの・よしお）
会員番号5815 永年会員

1938年2月6日 神奈川県片瀬海岸にて誕生
1956年 湘南高校から早稲田大学法学部入学、山岳部入部
1960年3月 法科系大学院へ進む
1962年 アンデス・アルパヨ登山隊
1964年 日本山岳会に入会
1965年 ローズ・シヤール登山隊
1967年 イアン・ディマバド登山隊
1970年 早大山岳部監督に
1973年 日本山岳会常務理事（4年）
1980年 日本山岳会チョモランマ登山隊副隊長（北東稜隊）
1981～95年 早大山岳部部長
2025年3月26日 逝去、享年87

月の山岳部の剣岳遭難事故（3人が凍死）では、大変なご苦労をされたと聞いた。一方、大学の教育学部やスポーツ科学部の教壇に立ち、スポーツとしての登山、趣味としての山登りを問わず山での事故について法的な責任をどう考えるか教示する立場に身を置いた。

1965年のローズ・シヤール登山から帰った後、日本山岳会で常務理事として迎えられ、会の運営にもタッチされた。私が一緒したチョモランマ（エベレスト）登山のことを思い出しながら、その人となりをご紹介したい。

文化大革命後の中国が登山を許可して、日本山岳会の大部隊がチベット入りした。ベースキャンプまでは濱野さんと行動をともにし、健闘を誓い合いながら北東稜隊と北壁隊の前進キャンプに分かれて出発した。当時、チベットの協力員は何人かいたが、ネパールのシエルパの採用、参加は認められず、隊荷は自分たち隊員で荷上げをしなければならなかった。私も北壁隊の荷上げに出たものの途中で心筋梗塞を起こし、BCでの養生を余儀なくされた。

そんなある日、乗りにくそうなゾッキョ（ヤクと牛の交雑種）に乗って、ふらつきぎみで濱野さんがBCに戻って来た。ドクターの診断は、持病の十二指腸潰瘍。副隊長としての責任の重さや、精神的負担から体調を崩されたのだと思う。お互い上部での登山活動を気にしながらBCでの養生に専念した。濱野さんも、いつもの濱野節が聞かれるまでに回復され、トラシシーバーで北東稜隊の指揮を執るまでになった。

チョモランマ登山隊は、単に登頂するだけでなく世界最高峰の頂上でテレビ撮影（中継）すること

大きな目的としていた。そのため濱野・北東稜隊も高所に強くて経験豊富な加藤保男とカメラマンの中村進隊員が頂上へ向かったのだが、カメラ機材の重みで中村隊員が調子を崩し、加藤隊員についていけない。BCで濱野副隊長はトランシーバーを抱えたまま、アタック隊の2人がとるべき行動について判断に迷っていた。苦渋の選択……。この苦境をBCにいる新聞やテレビの報道陣がどう伝えるかも気にしていた。

濱野さんは、中村隊員を置いて加藤隊員独りで頂上へ行くことを指示した。結果、加藤隊員が頂上に登り、2人は8000mの別々の場所までバークし、生きて帰って来た。無事下山できるとの知らせに、濱野さんと私は抱き合って涙を流した。こうしてチョモランマでの戦いは終わった。

その後、濱野さんは大学に新設されたスポーツ科学部で教鞭を執られ、スポーツと法律（山での事故と責任）に関する分野で社会貢献し、後輩の指導育成に当たった。

濱野さんのご冥福を、心よりお祈りいたします。

（評議員）

追悼 赤羽孝一郎さん

飯村富彦

私が赤羽先輩にお会いしたのは、60年以上前の高校3年生のときだったと思います。

当時、松本県ヶ丘^{あかたが}高校山岳部の合宿は最低でも春、夏、秋、冬の4回あり、必ずと言っていいほどOBが参加し、厳しい訓練を受けました。

怖ろしいOBのひとりで、ひとり近く離れた赤羽さんの会社へ、何かの件で寄付をお願いに伺ったのが最初の出会いでした。緊張のあまり、ただ頭を下げるだけでしたが、快く応じてくださったので、紳士的な印象を持って帰りました。

その後8年の月日が流れ、再会したのは思わぬ出来事があったからでした。



赤羽孝一郎

(あかはね・こういちろう)

会員番号3802 永年会員
1933年 長野県松本市に生まれる
1950年6月 日本山岳会に入会
1951年 松本県ヶ丘高校から立教大学に入学
1978年 赤羽産業㈱4代目社長に就任
1984年 ネパール・カラパタールヘトレッジ
1988年4月～94年3月 日本山岳会信濃支部長を務める
1991年 アンナブルナ山群一周とトロノ・パス越え
2018年 赤羽産業㈱会長に就任
2025年3月26日 逝去、享年87

1969年にネパール政府がヒマラヤ登山を解禁したこともあって、高校山岳部OB会として以前から海外遠征を目論んでいた我々に、71年プレ・モンスーン期のダウラギリV峰(7618m)の登山許可が下りたのです。

詳細は省くとして、幾多の困難があり、一時は諦めかけたこともあったなか、3月20日、ポカラからキャラバンを開始しました。

5月4日、C4から頂上へ向かった3人が体調悪化により引き返すことになりました。それを受けて、同じくC4から救援に向かった嚮隊員と私の2人は、6900m地点で100mくらい上部を下って来る3人を発見します。ほっとしたのか私は3人から目線を切つてしまい、何秒かののち、嚮君が「落ちた!」と叫んだため振り向くと、横の急斜面を舞い上がるよ

うに落下していく3人……。どうすることもできず、やがて3人は点となり、コーナボン氷河に消えていきました。

遭難の知らせが日本に届くと、赤羽邸が遭難対策本部となりました。矢崎源市隊長と私はひと足早く帰国し、多くの関係者とともに赤羽家に押しかけ、終日駆けずり回りました。陣頭指揮に当たった赤羽さんは仕事を犠牲にし、奥様はじめご家族の皆様には多大なご迷惑をお掛けしました。6月13日に合同慰霊祭を行なうことができたのは、ひとえに赤羽さんのお陰だと思っています。

翌年の72年、信濃支部は以前から計画していたヒマラヤ遠征に向け4名の偵察隊を派遣し、73年プレ・モンスーン期のアンナブルナI峰(8091m)の登山許可を得ました。

3月14日、ポカラからキャラバンを開始し、5月14日、C5からアタックするも頂上直下で体調悪化のため引き返します。その後天候が悪化し登山続行を断念、撤退する5月18日、雪崩により4名の隊員と1名のシエルパが遭難しました。

5月27日、遭難の知らせが松本の赤羽事務局長宅に入り、直ちに遭難対策本部となりました。このときも赤羽さんは、7月7日の合同慰霊祭に向け、仕事とご家族を犠牲にして陣頭指揮を執ってくれました。

赤羽さんは昭和27(1952)年、松本県ヶ丘高校を卒業すると、立教大学へ進学しました。高校山岳部員だった同期や後輩が山岳部へ入部し活躍する一方、赤羽さんはスケート部に入部します。推測するに、家業である会社の次期社長を運命付けられている身としては、危険が伴う山岳部を避けたのでしよう。

大学を卒業してからは松本に帰り、赤羽産業㈱に入社し、家業の発展に尽くすとともに信濃支部に入り、登山を再開しました。ただし、昔のような厳しい山ではなく、たくさんのカメラをそろえ、写真撮影を趣味とする山登りでした。

山と酒とタバコを愛し、豪快さとリーダーシップがあり、何よりも気配りの人でした。長い間お世話になりました。感謝、感謝でいっぱいです。

(元信濃支部長)

創立20周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅣへ上

カラコルム・バルトロ氷河を往復
威風堂々たるK2と感激のご対面

文：榛葉千穂 画：阿部君枝

2025年6月から7月にかけて行なわれた日本山岳会120周年記念事業のグレート・ヒマラ

ヤ・トラバース(7回目)に参加した。テーマは「温故知新」。2020年、カンチエンジュンガ(ネパ



コンコルディアから見たK2 作画：阿部君枝

GHTステー
ジⅦメンバー
◆バルトロ氷
河十ビアフ

ル東部とイン
ドの国境周
辺)から始ま
ったGHT踏
査も、今年が
最終ステージ
となる。私は
一番短い(そ
れでも37日間
だが)バルト
ロ氷河を往復
するコースに
参加した。踏
査期間は6月
15日～7月22
日。

氷河、ヒスパ氷河コース

重廣恒夫隊長、吉井修、飯田邦

幸、轟 涼、梅村一之、柳田泰則

◆バルトロ氷河往復コース

松田宏也、中村三佳、阿部君枝、

榛葉千穂

◆バルトロ氷河十スパンテイク
(7027m)登山

中谷康司、中谷みどり

バルトロ氷河は、パキスタンの
カラコルム山脈中央部に位置し、
その全長は約69km、幅は最大3km
に及ぶ。バルトロ氷河周辺は、世
界有数のトレッキング・ルートと
して知られている。アスコーレを
起点とし、ジョラ、パイユ、コボ
ルツェ、ウルドゥカス、ゴレイ、ゴ
レⅡなどのキャンプ地を経由して
コンコルディアへと向かう。私た
ちは、コンコルディアからさらに
K2ベースキャンプ(BC)、ガッ
シャールムBCにも足を延ばし
た。

バルトロ氷河往復隊行程

6月15日…羽田空港発

16～17日…イスラマバード泊

18～20日…スカルドウ泊。準備

21日…スカルドウ(車)アスコーレ

22日…アスコーレ～旧ジョラ(標

高3150m)

23日…旧ジョラ～モンジン

24日…モンジン～パイユ(3400m)

0m)

25日…パイユにてレスト。松田隊

員、ヘリコプターにて緊急

搬送

26日…パイユ～コボルツェ

27日…コボルツェ～ウルドゥカス

28日…ウルドゥカス～ゴレⅡ

29日…ゴレⅡ～コンコルディア
(4500m)30日…コンコルディア～ブロー
ド・ピークBC(4830

m)

7月1日…ブロード・ピークBC
～K2・BC

2日…K2BC～コンコルディア

3日…コンコルディアにてレスト

4日…コンコルディア～シャグリ
ン5日…シャグリ～ガッシャール
ムBC&周遊(5150

m)

6日…ガッシャールムBC～コ
ンコルディア

7日…コンコルディアにてレスト

8日…コンコルディア～ゴレイ

9日…ゴレイ～コボルツェ

10日…コボルツェ～パイユ

イメージと違ったパキスタン

11日…バイユール・ジョラ
 12日…ジョラール・アスコール
 13日…アスコール・スカルドゥ
 14日…スカルドゥ泊
 17日…イスラマバード泊（松田さんと再会）
 22日…成田空港着



コンコルディアから見たブロード・ピーク 作画：阿部君枝

イスラマバードから飛行機で1時間のスカルドゥへ移動。その後は車でアスコールという最奥の村まで入り、そこからは歩きで、いよいよ22泊23日のテント泊山行が始まる。

そもそも行くまでは未知の世界だったが、パキスタンの情報は日本にいとほとんど入ってこない。ガイドブックの『地球の歩き方』も2007年に出たきりで、その後は発行されていないのである。折りしも、インドとパキスタンがドンパチを始めたなかで、本当に行けるのだろうかと思いつつ、ぎりぎりのビザ発給で、まさに滑り込みセーフでの出発となった。しかし、隊長

の重廣さんだけはなぜかビザが下りず、1週間遅れての出発となった（のちにこれが功を奏することになる）。

「パキスタンへ行く」と知り合いに言うと、皆一様に「大丈夫？ 危ないんじゃない？」と心配された。私も同じイメージだったが、しかし、行ってみると全然違った。確かにホテルの入り口には銃を持った警備員がいるので物々しいのだが、人々は皆とても優しいのだ。すぐに声を掛けてきて「どこから来たの？ 日本？ パキスタンはどうですか？」と聞いてくる。「いい国ですね」と答えると、とても喜ぶ。

走っている車はほとんど日本車でトヨタ、スズキ、イスズ、ヒノなど。アスコールの村までダート道のものすごい悪路を走るのだが、それも全てトヨタのランドクルーザー。日本人としてはなんとなく鼻が高い。

アスコールからはいよいよ踏査の開始だ。23日間のテント泊という、いまだかつて体験したことのない長いテント泊に期待と不安が

入り交じる。日中は35度という暑さの中、初日に20kmも歩いたのはなかなか厳しかった（しかも山道ではなく、ダート道）。

毎日8時間ぐらい歩きながら、1週間ぐらいかけてようやくK2のBCにたどり着くのだが、だんだん松田さんの体調に異変が生じる。元々、下痢きみだったようだが、それに加えて熱中症とコロナ（これは後から分かったことだが）になり、4日目のキャンプ地パイクで緊急搬送することになった。ヘリコプターで出発地のスカル



雪煙たなびくK2をバックにBCにて。樺葉隊員（右）と阿部隊員



バルトロ氷河往復隊と三大氷河踏査隊の記念撮影。コンコルディアにて

パイユから先はいよいよバルトロ氷河の始まり。氷河と言うと、平らな雪の上を歩いて行くのをイメージしていたが、実際は小高い丘のようなアップダウンの多い所をいくつも乗り越えて行く感じだ。そのため、かなり歩いた気がしてもあまり距離が稼げていなく、結構疲れる。しかし、さすが足元は氷河だけあって風が吹くと涼しい。

四囲の名峰群を眺めながら 憧れのコンコルディアへ

そして、このあたりから山の景色がすばらしいものとなってくる。マッシャーブルム、ムスターゲ・タワー、スキルブルムなど7000m級の山々が、これでもかというぐらい見え始める。

そして、コンコルディアに着いたときには、K2が目の前にドド

ーンと見える。カッコいい！さすがK2、威風堂々としている。なるほどこれがK2か、すごいなあ。いつもはテレビでしか見られない山が目にあるのは、感動的だ。

翌日は、K2のBCに向かう。途中、ブロード・ピークを登っている人が蟻のように小さく見えた。思わず、私も登ってみたいという衝動に駆られた。K2の登り口にはたくさん慰霊碑があり、広島三朗さんのほか、昨年亡くなられた平出和也さん、中島健郎さんのものもあった。日本から用意してきた線香を焚いて弔う。パキスタン登山ガイドのベイグさんも、ウルドゥ語でお祈りをしてくださった。

再度、コンコルディアに戻った後は、今度はガッシャーブルムBCへ。我が隊のポーターの1人が重度の高山病になってしまい、苦しそう。高度が5000mを超えたので、ほかのポーターたちも頭痛を訴え始めた。本来はガッシャーブルムBCに2泊する予定だったが、1泊で切り上げてコンコルディアへ戻る。そこで、遅れてバルトロ氷河入りした重廣隊長と合

流することができた。その後は来た道をそのまま戻り、ジョラまで行き、ジョラから車でアスコレまで戻った。

7月17日にイスラマバードへ戻り、それまで病院で入院していた松田さんとホテルで再会できた。だいぶ痩せてしまい、かわいそうなぐらいだった。なんと松田さんを日本に連れて帰りたいという一心で21日の帰国に向けて体をマッサージしたり、足のリハビリを行なったりし、21日の夜、イスラマバードから帰国の途についたのであった。

＊

今回、初めての海外登山でいろいろと分からないことも多く、当初は参加していいのかなあ、と不安と迷いがあったが、実際にパキスタンに行ってみて、本当に良かったと思うている。8000m級の山々を間近に見ることができ、すばらしかった。写真で見ると実際にこの目で見るとでは全然違う、と改めて思った。ご一緒していただいたメンバーにも恵まれ、私にとって貴重な経験ができた踏査行だった。

(千葉支部会員)

ドウまで搬送するのだが、誰か付き添いが必要なのは、という話になり、あわや私か？「まあ、それならそれでもいいや」と思っていたところ、ちょうど遅れてパキスタン入りした重廣隊長がスカルドウにいることが分かり、スカルドウでの対応を隊長に託し、私たちはそのまま踏査を続行することとなった。

図書受入報告(2025年6～8月分)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
千葉弓子	山岳ランナー 土井陵 王者の称号	215p/19cm	平凡社	2025	出版社寄贈
石川直樹	最後の山	272p/20cm	新潮社	2025	著者寄贈
中嶋豊	いざ!登る 信濃の山城:戦国の舞台 イラスト案内図	282p/21cm	信濃毎日新聞社	2020	出版社寄贈
中嶋豊	続編 いざ!登る 信濃の山城:戦国の舞台 イラスト案内図	276p/21cm	信濃毎日新聞社	2025	出版社寄贈
フローリアン・リウ/木村高子 訳	ヨーロッパの美しい山: ALTITUDES	224p/23cm	日経ナショナルジオグラフィック	2025	出版社寄贈
柏村祐司	栃木県山岳誌: 山の信仰と山民の暮らしをとく	251p/22cm	随想舎	2025	出版社寄贈
奈良山の考古学研究 会 編/森下恵介 他 著	大和青垣の山々: その歴史と文化	178p/21cm	青垣出版	2025	出版社寄贈
高野靖彦	立山観光ヒストリア: アルペンルート以前の観光史	270p/19cm	北日本新聞社	2025	著者寄贈
地球の歩き方編集室 編著	スイス(2026-2027年版): 地球の歩き方	496p/21cm	Gakken	2025	出版社寄贈
地球の歩き方編集室 編	ネパールとヒマラヤトレッキング(2025-2026年版): 地球の歩き方	384p/21cm	Gakken	2025	出版社寄贈
小宮山花	私、山小屋ははじめます	231p/19cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
山野井泰史	アルピニズムと死: ぼくが登り続けてこられた理由/ヤマケイ文庫	240p/15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
菊地敏之	冒険者たちの心理: 彼らはなぜ命を賭けるのか/ヤマケイ新書	288p/18cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
後藤真一	丹沢の谷200ルート: 新版	320p/21cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
内田嘉弘	山の王者を歌う: 私の山登り	152p/21cm	私家版	2025	著者寄贈
猪股清郎	「即身」の山: 山への「片思い」の記録	485p/22cm	私家版	2025	著者寄贈
佐古清隆	山岳展望図集 150山	243p/21cm	私家版	2023	著者寄贈
北海道大学ワンダー フォーゲル部 創部70周 年記念誌 編集委員会 編	道標: 創部70周年記念誌(1955-2025)	424p/30cm	北海道大学ワンダー フォーゲル部OB会	2025	発行者寄贈
Lee Injung	Mountaineer Lee Injung and the 1980 Manaslu Expedition	468p/31cm		2025	李仁禎氏寄贈
Maluck Kai	Himalayan Rocks: The Rock Climbing Guidebook to the World's Highest M	422p/27cm	tmms-Verlag	2025	著者寄贈
Smart David	Royal Robbins: The American climber	256p/23cm		2023	購入

東西南北

N

S

ウェストンと一葉の記念

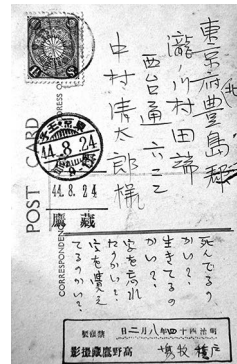
写真〈下〉

高野鷹蔵から中村清太郎宛の絵葉書に見る関係

小原茂延

発起人の高野鷹蔵が中村清太郎に宛てた絵葉書(写真)を東大前の古書店目録で見つけたのは5、6年前だったが、昨年末になって購入した。日付は明治44年8月24日(ウェストン招待宴の約半年前)で端正な字で書かれているが、その文言に驚かされる。「死んでるのかい?/生きてるのかい?/字を忘れたのかい?/字を覚えていいのかい?」4歳くらい年長とはいえ、よほどの親密さがない限り、こゝうもストリートに書くことはできないだろう。

ウェストン招待宴の写真を撮ったとされる高野鷹蔵と、その公表を控えたと思われる中村清太郎の



中村宛、高野の葉書

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

関係が浮かび上がってくるような気がする。小島烏水がその間の事情を承知していたのではないかと思われるのは、三者がその後、そろって阿佐ヶ谷に終の棲家を定めているのも見逃せない。それも先に住んだ中村が、隣地550坪を烏水に斡旋し、横浜で関東大震災により焼け出されて傷心痛々しい高野の土地探しを、中村が出入りの植木屋に探させたことからその絆の深さがうかがえるのである。それほどまでに「ウェストン招待宴」の写真公表を控えた理由とはなんであったのだろうかといえ、考えられるのは宴席での席次が主賓のウェストン夫妻は当然な

がら、その並びに小島烏水と岡野金次郎兩人が迎える側の正座に付き、ほかの発起人を含めた会員は両脇に順次座を占め、コの字型になっている。全国の会員、さらには後世の会員らに序列のごとく見られるのを避けたかったのではないだろうか。そう考えて見れば、岡野金次郎が何やら指し示しながら晩年の写真からは想像できない闊達な表情さえ見せている。

高野鷹蔵の追悼文(『山岳』第六十年・1965年)で中村清太郎がこの柳橋「亀清」での招待宴を振り返って「……ウェストン夫妻を正座に、小島、高頭、高野、辻本、辻村、梅澤、三枝、そして私も席末に列した。……」と書きながら、烏水と同じ扱いの座に岡野金次郎がいることには触れず、無視した形をとっているのは、すでに確執が生じていたからであろう。

このウェストン招待の宴席で「寄せ書き」を行なったようで会報「山」759号(2008年8月号)の「東西南北」欄で長田義則会員が解説紹介している。右上に小島久太、その隣に中村さん? (特に説明なし)とあるほか、左下に作者であると推定される高野の図案と1

912がある。幾人かを指摘とあって、加賀正太郎、ローマ字の高野、高頭、梅澤、鳥山悌成とあって、高頭の右に筆太で「岡野」とあるのだが、触れていないのも腑に落ちない気がしていた。

ともあれ、岡野金次郎にとって姻戚に望月達夫がいたことが幸いした、と言えるのではないだろうか。退会後も日本山岳会史に埋没することなく、先駆者として称えられる機会に恵まれた陰に望月の働きがあったことは見逃せない。ただ、岡野が発起人に名を連ねず、目立つことを避け、一途に己の登山を貫いた生き方をとったことを理解するべきで、復活を喜ぶあまり過大な評価を与えることは控えたい。

(資料映像委員会委員・埼玉支部)

映画『てっぺんの向こうに あなたがいる』

八木原図明

本年10月31日(金)から田部井淳子さんファミリーを描いた映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』が公開される。50年前の1975(昭和50)年5月、「世界最高峰

エベレストに女性として世界初の登頂成功」として世界中に田部井淳子の名を知らしめたあの田部井さんだ(本会会員)。10月20日に亡くなって、今年で9年になる。「登山」は大きな主題だが「登山の映画」ではない。

田部井さんの人生を変えたこの快拳は、「国連が制定した『国際婦人年』と重なったことでさらに評価や話題の輪を大きくした。世界的ヒロイン「ジュンコ・タベイ」の名前は男女平等や女性の社会進出などの時代背景の象徴の一つとして、世界中を独り歩きました。

ご本人も最初はさぞや戸惑っただろうし、当時の田部井さんには重荷でもあったと思うが、大きな飛躍、活動を広げるチャンス、ステップになったのではないだろうか。登山界も男社会だった。そんな中でつかんだ「世界初」の榮譽に、自身の立場の大変さも認識せざるを得なくなった。

ご主人政伸さんは、群馬県前橋市出身のホンダ山岳部の精鋭クライマーだった。内助の功を果たす田部井夫妻の馴れ初めも谷川岳の一ノ倉沢だった。有名人の子として生まれてしまったがゆえの子息

の苦悩や反抗も描かれる。その子息も長ずるに及んで家族のきずなを取り戻し、母亡き後も東日本大震災で被災した高校生の富士登山を続けている。

本作品の俳優陣は豪華だ。田部井さん役は吉永小百合。今回が124作目の出演だそう。青年期は「のん」。政伸さん役は佐藤浩市。読売記者だった北村節子さん役は天海祐希。阪本順治監督は「こんな殺伐とした世の中だが、老若男女元気になる映画になったと自負している」と語る。

吉永さんは、大決心をしてピアスを開けたそうだ。吉永さんも役に倣い生まれて初めてピアスを開けると、解放されたような気持ちにはなったが、ピアスを開けると1ヶ月間泳いではいけないとお医者さんに言われたのは辛かった、とのエピソードも。

撮影は全て日本国内で済ませた。谷川岳山岳資料館所蔵の登攀具、装備類もたくさんお貸しし、昨年11月には雪の立山での撮影にも同行し、多少のアドバイスもさせていただいた。立山では10年前の映画『神々の山嶺』の撮影で、ネパールで一緒だったカンチャ・シエル

パさん(今は日本で結婚し働いている)が「シェルパ役」で出演している旧交を温めた。教師の奥さんは昨年の12月に冬休みを利用してカトマンズに行かれ、そこでもエベレスト・トレッキングから帰った私を訪ねてくれた。

山好きでなくとも楽しめる。ぜひともご覧いただきたい。

創立120周年記念式典並びに 年次晩餐会のご案内

本年は創立120周年に当たするため、記念式典と年次晩餐会を同日に開催します。そのため特別プログラムを用意し、海外からも多くの来賓をお迎えします。お誘い合わせのうえ、多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

○日時 令和7年12月6日(土)
京王プラザホテル

12時30分 受付開始
○記念講演会(13時)

「1924年英国エベレスト隊のG・マロリー遺体遺品発見調査」隊員ヨッヘン・ヘムレブ氏。演題は「日本山岳会とヒマラヤ登山」

○記念式典(16時30分) 17時30

(公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会顧問/群馬支部会員)



分) 秩父宮記念山岳賞授与、新永年会員紹介、新入会員紹介など

○祝賀晩餐会(18時) 20時30分

○展示会(13時) 創立120周年記念各プロジェクトによる活動展示

○記念山行・高尾山薬王院) 12月7日(日)「山」10月号にて案内と詳細をお知らせします。HPもご覧ください。

*宿泊 池袋ロイヤルホテル(1泊素泊 1万2500円(税・サ込)、シングル40室)、支部の方々を中心に先行予約を受け付けます。詳細はHPをご覧ください。

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

第68回高頭祭／第70回弥彦山
たいまつ登山祭

昨年引き続き2回目の高頭祭&弥彦山たいまつ登山祭に参加した。お昼の12時に一峰会の遠藤会長と弥彦駅にて待ち合わせ、弥彦神社にお参りし、身が引き締まる。

表参道を歩き始めるが、この日も猛暑。流れる汗をぬぐいながらひたすら歩く(とにかく暑い)。5合目を過ぎ、やれやれ7合目の水場に到着。まさに弥彦山の恵みの水にありがたさを感じながら一服。

ここから弥彦山太平園地の高頭仁兵衛翁寿像前へ。やっこのことで高頭祭に間に合った。献花の後で高頭さんの功績を聞き、偉大なる岳人に驚くばかりだった。

昨年の「弥彦山たいまつ登山祭」は、アジア山岳連盟30周年「国際山岳平和祭」の一環として催され、ア



高頭祭参加者による記念写真

ジア諸国の岳人が大勢参加されて、たいまつ登山は弥彦神社から歩き始めた。今年は山頂からたいまつを片手に山を下る。幻想的な雰囲気包まれ、ほかで味わったことのない不思議な体験をしながら無事下山した(準備を下さった方々に感謝)。そののち温泉街を練り歩き、観衆からエールと花火に迎えられるて終了。冥加屋にて懇親

を深めた。

(川島万里子)

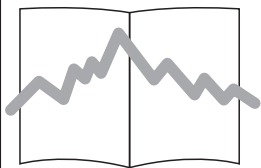
今年の高頭祭は、柏副会長はじめ神崎忠男氏、八木原罔明氏や他支部の多くの会員をお迎えして開催された。炎天下の中、60名が集集した。献花・献酒のセレモニーの後、桐生前副会長より「日本山岳会創立120周年と高頭仁兵衛」と題して記念講演があった。

高頭祭の1回目は、1950(昭和25)年7月2日、寿像碑の竣工を記念して初代越後支部長の藤島玄氏をはじめ、支部会員10名が参加して開催された。年々参加者が増え、今年で68回を迎えた。寿像碑は、建設当時には弥彦山山頂にあったが、御神廟への社務所建設により、現在の太平園地に移転して支部主催の高頭祭となった。第2回は54(昭和29)年7月13日に、第1回たいまつ登山祭と新潟県登山祭と同時に開催され、高頭

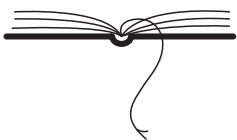


幻想的な雰囲気の中、たいまつ登山祭の行列

祭終了後にたいまつに点火して御神廟を一周して下山を開始した。その様子を平野から見ると竜が降りるようであったそうだが、今では樹林が育ち見えなくなっている。この祭は年々盛大になり、高頭祭68回、たいまつ登山祭は70回を迎えた。毎回150名以上の参加者を数え、新潟の岳人が全国に誇れる登山祭になった。(小山一夫)



図書紹介



ニルマル・プルジャ著

西山志緒訳

最強登山家プルジャ



2024年12月
集英社 400頁
四六判 2700円＋税

ニルマル・プルジャをご存じだろうか？ ネパールの貧しい家に生まれ、グルカ兵、英国船艇部隊を経て、2019年にプロジェクト・ポッシブルという名の下で、8000m級14座（以下、登頂順にアナンプルナー峰、ダウラギリI峰、カンチェンジュンガ、エベレスト、ロツツエ、マカルー、ナンガ・パルバット、ガツシャーブルムI峰、同II峰、K2、ブロード・ピーク、チョ・オユー、マナスル、シシヤパンマ）をこれまでの最短記録である韓国のキム・チロンホの7年10ヶ月6日を大きく下回る、6ヶ月6日で踏破した登山家である。

本書の内容を簡単に紹介しよう。前半部では、プルジャがグルカ兵になり、さらに英国特殊船艇部隊の一員になるべく志願し、トレーニングを行なった経緯、1ヶ月の

休暇を利用して、単独でエベレスト登頂を果たし、さらに下山時に遭難者を助けたエピソード、そして、十数人のグルカ兵たちがサウス・コル経由でエベレストを目指した「G200遠征」に指導官として参加したこと（これで、プルジャにとっては2度目のエベレスト登頂となる）などが紹介されている。

後半部では、その経験を経て軍を辞め、8000m級の山14座を7ヶ月で制覇するという計画を立てたのが、本題の「プロジェクト・ポッシブル」というプロジェクトである。資金がない中、自ら資金集めから始めたこと、最初は相手にされず、笑われていたことなどが記されており、このプロジェクトを立ち上げた際の大変さがよく伝わってくる。だれにも相手にされない中、この難題を一つ一つクリアしていく、スポンサーを見つけ、さらに実際に登っている写真を公開して、プルジャが成したことが公開されることで、このプロジェクトが世に知られるようになる。必要な費用が少しずつ集まり、とうとう6ヶ月6日後に14座登頂の偉業を達成することになったプロセスが伝わってくる。

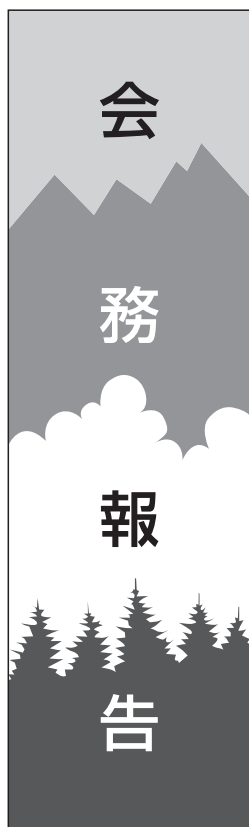
プロジェクトを進めるに当たり、周辺で起こった出来事も記されていて興味深い。たとえば、エベレストで撮影した写真を販売してプロジェクトの資金の足しにしようとしていたとき、政府当局に、その写真によって毎日のように渋滞が起きているという誤解を生んで、エベレスト登山者数の制限を求める声が高まってしまう。それで呼び出されたことや、プルジャが携わった遭難者の救助物語、山中で酸素ボンベが盗まれた事件などだ。最後の3座は中国とチベットにある山だが、両国当局の許可が下りず、苦労した話、場合によっては別の山に登って14座に、と考えていたことなども記されている。

に発揮されてきたことも見て取れる。さらに、このプロジェクトの成功は、「想像力と決然たる意思があれば、どんなことが達成可能か身をもって示すと同時に、この惑星、そしてそこに暮らす人たちが直面する課題のいくつかにも光を当てることができた」と結んでいる。

このプロジェクトの成果という面では、8000m峰14座完全制覇の過去最短記録だけでなく、エベレスト頂上、さらにマカルー頂上への到達、世界最高峰5座制覇、パキスタン高山上位5座の世界最速記録、単独シーズンに頂を制覇した8000m峰の最多記録を更新している。

このような偉業を、ぜひ本書を通して知っていただきたい。

（床田真理）



■8月の理事会は夏休みのため休会でした。

ルーム目誌

8月

- 1日 入会説明会
4日 記念事業委員会（山岳古道調査）
5日 広報委員会
6日 山行クラブ
7日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会
13日 かつばの会

電子版会報「山」の登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知（メール）や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会 (internet@jac.or.jp) にお問合せください。

【電子版への登録】↓

<https://jac1.or.jp/kaiin/>

2025040135272.html



- 16日 アルピニズムクラブ
18日 総務委員会 YOUTH CLUB委員会
19日 総務委員会 麗山会 沢登り同好会Ⅱ
20日 東京支部 山遊会
22日 上高地クラブ
25日 緑爽会
26日 平日クラブ
27日 子どもと登山委員会
28日 記念事業委員会（グレート・ヒマラヤ・トラバース）
29日 創立120周年記念事業委員会 東京支部

8月来室者 155名

会員異動

物故

- 遠藤禎一（5320） 25・8・25
前田直己（10217） 25・8・13
村上 哲（11892） 25・8・8
荒木浩二（11897） 25・7・25
退会
内山雄介（16667）
長谷部康子（16757） 埼玉
小村和彦（16859） 山陰
北山智也（A0482） 広島

I N F O R M

インフォメーション

A T I N

◆埼玉支部設立15周年記念講演会

「あなたを待っている山がある」

埼玉支部設立15周年を記念して講演会を開催します。登山愛好家・田部井政伸氏をお招きし、前半で自身の登山やクライミングについてお話しいただきます。後半では副会長・柏澄子氏とのトーク

ショー形式で行ない、「東北の高校生の富士登山」などのお話を掘り下げて伺います。ぜひお越しください。

日時 11月29日(土) 14～16時（開場13時30分）
場所 ウェスタ川越 活動室1・2
〒350・1124

◆一般および会員向け自然保護講演会

参加者募集のお知らせ

日時 10月31日(金) 18時30分～20時30分（受付開始時間18時）
場所 オープンイノベーションフィールド多摩 国分寺館4階 セミナールーム2（JR国分寺駅南口から徒歩5

問合せ 埼玉支部事務局 ☒ sun-info@jacmember.com
15周年記念実行委員会 若林 優子 ☒ yw16391@jacmember.com

申込み 左のリンクから

<https://forms.gle/ufGalyzYUlmqP8r77>

会費 無料（定員120名 定員になり次第締切り）

会長・柏澄子氏

部井政伸氏×日本山岳副

第2部 トークショーⅡ田

家・田部井政伸氏

講演 第1部 講演Ⅱ登山愛好

49・3777

徒歩約15分 ☎ 049・2

西武新宿線・本川越駅から

川越駅西口から徒歩約5分、

J R川越線／東武東上線・

川越市新宿町1・17・17

155名

分

主催 東京多摩支部自然保護委員

会

演題 どっちが迷惑? 野生動物

VS ヒトと町に暮らす野生動物

とヒトとの微妙な関係

講師 日本野生生物リサーチセン

ター代表・里中遊歩氏

定員 60名(先着)

参加費 500円(資料代他)

申込み Eメール、Faxにて参

加者全員の氏名、住所を明

記し10月24日(金)までに、日

本山岳会東京多摩支部 自

然保護委員会宛て 河野悠

二 ☎ & Fax 042・

544・4738 ☎

kyuji@mwdbiglobe.ne.jp

◆講演会のお知らせ

アルピニズムクラブと緑爽会では、左記のとおり講演会を共催します。

先般、モンゴルで開催されたアジア山岳連盟総会の模様について、そのときの映像を交えて、神崎会員よりお話しいただきます。アジアの山岳界の現状などについても語っていただきます。また、創立120周年を迎える日本山岳会の

国際事情についてもお話しいただきます。

日時 10月18日(土) 13時30分

場所 ルーム104室

講師 神崎忠男会員

演題 最近のアジアの山岳界、国

際事情について

申込み 今田明子 ☎090・2

140・3226 ☎

imada@mwdbiglobe.ne.jp

荒井正人 ☎090・77

19・7855 ☎

masatonyama@gmail.com

◆「田部井淳子さんたちの軌跡」

女性初登頂50周年記念講演会

今から50年前の1975年5月

16日、登山家の田部井淳子さんは

女性として世界で初めてエベレス

トに登頂しました。日本女子登山

隊の一員として田部井さんの登頂

を支えた元読売新聞記者の北村節

子さんに、若き日のエベレスト登

頂から晩年の闘病生活まで、田部

井さんとの交友関係を振り返り、

その後の日本人女性の登山史を話

していただきます。なお、北村さ

んも本会会員です。

演題 田部井淳子さんたちの軌跡
講師 北村節子氏

日時 10月18日(土) 14時～15時30分

会場 千住ミルデイス1番館11F

シアター1010 ギャラ

リーA

受講料 2200円

問合せ よみうりカルチャー北千

住 ☎03・3870・20

61

訂正

*会報7月号(962号)3ページ、1段目の令和7年度通常総会・質疑応答欄で、「基金取り崩し」についての発言者を長田義則会員としていますが、黒川恵会員の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

*会報8月号(963号)10ページ2段目、「山の名著再読」の文中にある、「遠い山 近い山」の著者・望月達夫会員の本会入会年は、1932年の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます

*同号14ページの図書紹介欄『君はなぜ北極を歩かないのか』の筆者名、「保科雅之」とあるのは「保科雅則」会員の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

(編集部)

◆編集後記◆

●現在、毎月の会報編集と並行して、JAC創立120周年記念出版『日本山岳会の歩みと近代登山史』という書籍の編集作業を行っています。登山史や内外の山岳書、地図などに造詣の深い見玉茂会員が、膨大な量の『山岳』や会報を渉猟して先人たちの踏み跡をたどり、一書にまとめてくれているものです。乞うご期待！

●右記の本に携わってみて、改めて記録し文字に残すことの大切さを痛感しています。本会のホームページから「山の資料」をクリックすると、『山岳』や会報のバックナンバーが全て見られます。120年にわたり営々と積み上げられてきた歴史のケルンの一つ一つから、馥郁たる登山文化の香りを味わってみてください。

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 964号

2025年(令和7年)9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重彰
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社